

アスポート学習支援員事業とは

家庭訪問

対象世帯を訪問し、教育相談・進路相談

- 家庭環境を把握
- 勉強や生活習慣の悩みを聞く
- 支援員と子ども・保護者との関係づくり

学習意欲を高めるために、子どもたちを学習教室につなげる。

学習教室

「わかる楽しさ」が実感できる学習環境

- 「学ぶ」ことで広がる世界、
- 子どもの良さを引き出す居場所
- 支援員やボランティアによるマンツーマン指導

子どもたち一人ひとりに合わせた学習支援に取り組む。



特別養護老人ホームをお借りして学習教室



なんでも質問できる学習教室



1
大学生ボランティアが丁寧に個別指導

校門の外で私たちが取り組んでいること

- (1) 生活困窮者自立支援法に基づく生活困窮世帯への生活・学習支援事業
- (2) 埼玉県（23町村）及び25市からの「委託事業」で、費用は全額、国と埼玉県及び各市
- (3) 事業内容
 - ① 学習教室の運営（120教室、小・中・高校生1700名、ほぼ、マンツーマン指導、無料、大学生ボランティア・元教員・社会人1000名ほど）
 - ② 家庭訪問（1700世帯）
 - ③ 学習教室での食事提供、体験、イベント（23教室、子ども食堂の方々の協力で毎週500食程度）
 - ④ 教育委員会、学校、SSW,民生委員、大学、農協・フードバンク・子ども食堂、企業（食材・会場提供など）社会福祉協議会などとの連携
 - ⑤ 支援対象は生活保護世帯、ひとり親世帯、就学援助世帯など

学習・生活支援事業の必然性

(1) 子どもの7人に1人が貧困状態で生活、貧困の連鎖が大きな社会的問題

2013年子どもの貧困対策法制定

(2) 貧困状態で暮らす子どもが抱える困難、不利益、不平等

- ① 学力 ② 不登校 ③いじめ被害 ④ 高校進学率（特に全日制進学率68%/93%平均） ⑤ 学びに向かう力 ⑥ 大人からの支え ⑦ 孤立 ⑧ ヤングケアラー

(3) 「貧困」は親と子供の自己責任とはいえない現実

- ① 経済的・精神的余裕がない世帯の生活の厳しさ
- ② ランドセルに家庭での「生活」を背負ってくる
・身だしなみ ・宿題 ・朝食 ・保護者のぬくもり、安心感

(3) 子どもの貧困ー校門の内と外の荒波が

① 貧困の連鎖の固定化ー生活保護家庭の4人に1人が大人になっても生活保護に

② 就学援助＋生活保護を受ける小中学生数

1995年 6.1% 61万人 → 2017年 15.2% 147万

③ 貧困率

1985年 12.0% 1400万人 → 2015年 15.6%

2000万人

④ 非正規労働者（専門職、管理職とパートを除く）

2017年 928万7千人（14.9%） 平均収入186万円

⑤ 奪われた「連帯し、対話する心と技術」

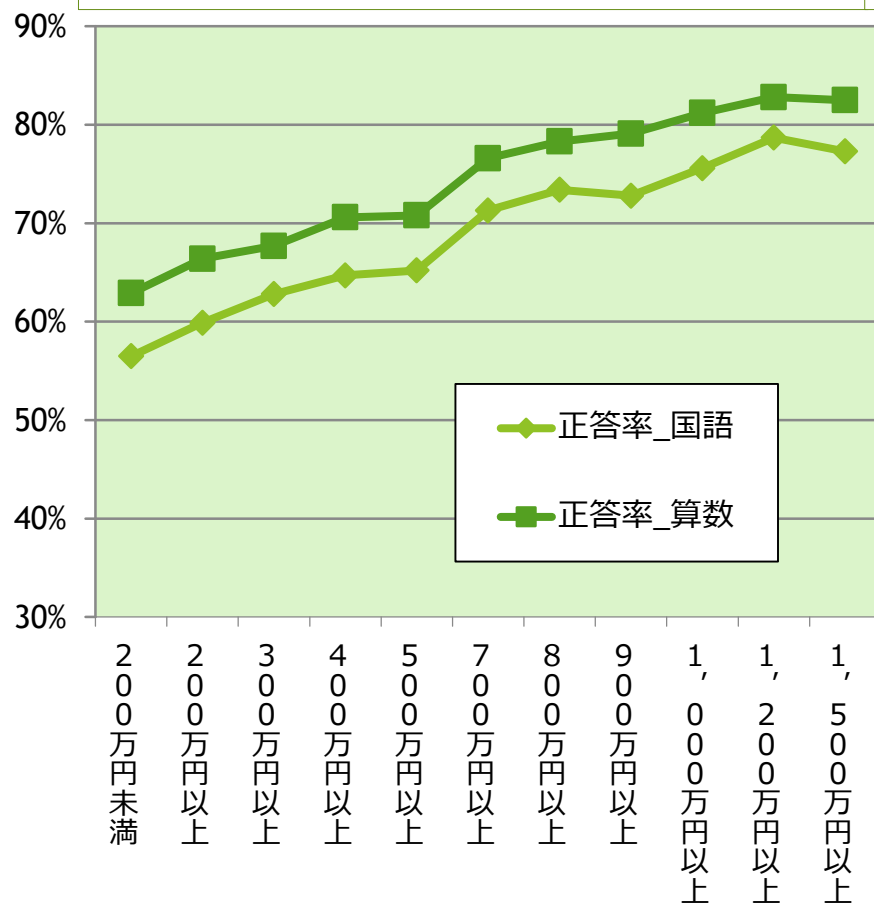
ー競争と自己責任の風潮 1980年以降

人間の能力を発揮させるためには競争的環境をあらゆるところにつくり、勝者は優遇し、敗者は罰を与える。勝ち負けをはっきりさせれば必死で勉強し、規律を守り、頑張るー「自分と家族の利益」のために

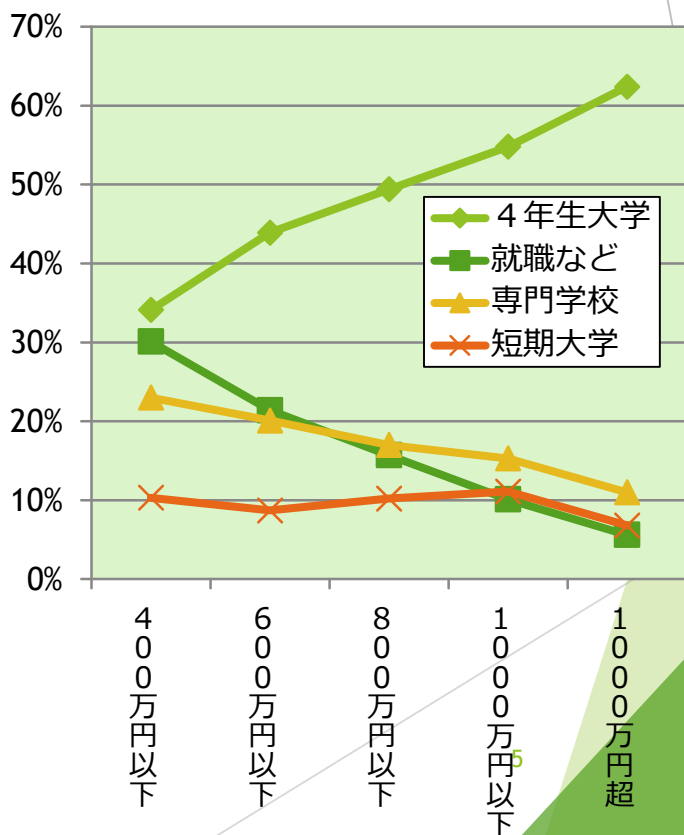
世帯収入と学歴・学力との関係

世帯収入と低学歴・低学力には強い相関関係がある

世帯収入と子どもの学力の関係
(文部科学省 御茶の水女子大学委託研究H21年度)



高校生の進路追跡調査
(東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター2007年)



学校での授業・活動に参加できる条件

- ① 身だしなみが整っている
- ② 宿題、連絡帳の課題が準備できている
- ③ 朝ごはんを食べている
- ④ 「行ってらっしゃい」と言ってくれる保護者がいる

日本の教育 — 序列化と画一化

▶ 日本の教育の特徴

＊垂直的序列化（キーワードは「能力」競争）

日本型能力・成果は「学力」が基準

＊水平的画一化（キーワードは「態度」「資質」）

道徳、スタンダード、ブラック校則、排除etc.

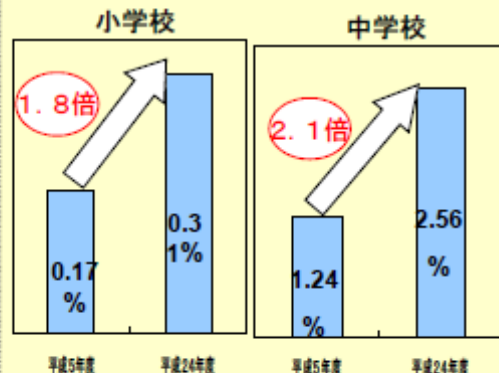
▶ それらは児童生徒の中に出身家庭の社会階層に基づく格差化と排除・抑圧を生み出している。

▶ 主たる要因は教育政策。不安定化・格差化する家族と、要求水準が高まる仕事の狭間で、学校と教員は過重な負担と資源の欠如のもとで疲弊している。

※本田由紀『教育は何を評価してきたのか』（岩波新書）

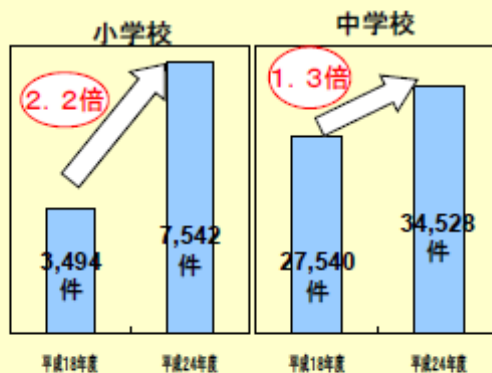
学校現場が抱える問題の状況について

不登校児童生徒の割合



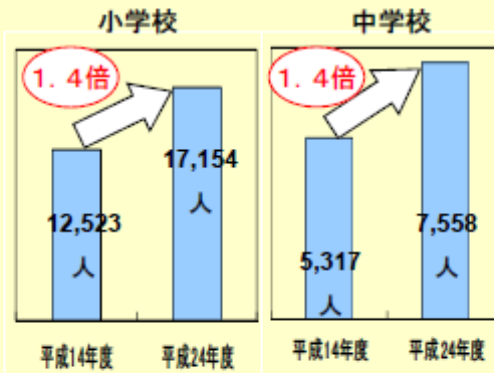
(注) 国・公・私立学校のデータ

学校内での暴力行為の件数



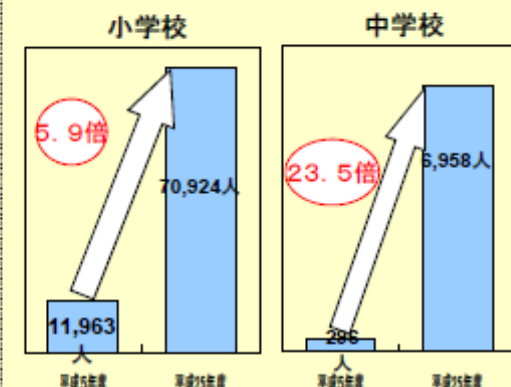
(注) 国・公・私立学校のデータ

日本語指導が必要な外国人児童生徒数



(注) 公立学校のデータ

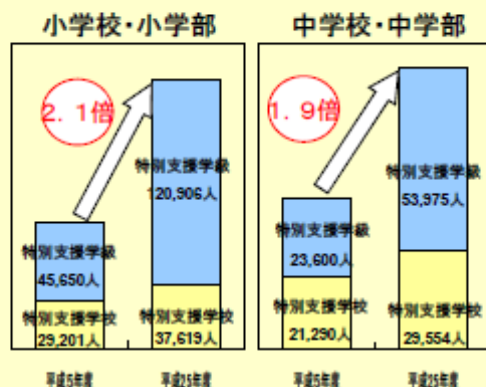
通級による指導を受けている児童生徒数



(注) 通常の学級に在籍しながら週に1～2回通級指導を受け、障害の状態等に応じた特別の指導を特別な場で行う教育形態。
平成19年度から通級による指導の児童はLD及びADHDを加えた。
小・中学校における通常の学級に在籍する発達障害(1LD・ADHD・高機能自閉症等)の可能性のある児童生徒の割合は、0.7%程度と推定されている。(平成24年度文部科学省調査。なお、学級担任を含む複数の教員により判断された結果に基づくものであり、過剰の影響によるものではない。)

(出典) 文部科学省「通級による指導実施状況調査」

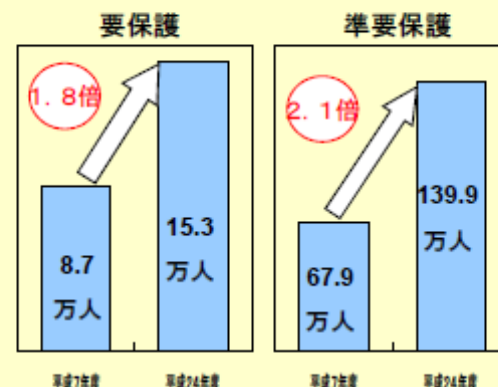
特別支援学級・特別支援学校(注)に在籍する児童生徒数(国・公・私立計)



(注) 平成5年度の特別支援学校は、盲・聾・養護学校に在籍する児童生徒数を合計した数字

(出典) 文部科学省「学校基本調査」

要保護及び準要保護(注)の児童生徒数



(注) 要保護とは、生活保護を必要とする状態にある者をいい、準要保護とは、生活保護を必要とする状態にある者に準ずる程度に困窮している者をいう。

(出典) 文部科学省調べ

3 コロナ禍で子どもたちは

—家庭の「教育力」「経済力」の差が歴然と現れる

(1) 給食がないと痩せる→ 弁当配達、食材配達で健康チェック

1日1食・2食 38%

(2) 課題がわからない、教えてくれる大人がいない

勉強時間 0～10分 40%

→安全対策を講じて家庭訪問、玄関前勉強

→希望世帯にはオンライン勉強（10%以下）、通信添削

→2021.6 埼玉県学力調査 貧困世帯、低学力児童のさらなる学力低下

(3) 「密室」状態でのストレス、親子のいさかい、昼夜逆転、引きこもり

→ 親からの電話相談、訪問して公園などに連れ出す

→ 全世帯への電話かけ、安否確認

(4) 改めて「対話」の大切さ

4 子どもたちが学習教室に通う理由 ーコロナ後の教室の在り方

(1) わからないことをわからないといってもいい場だから

① 質問する力は「生きる力」につながる

(2) となりに教えてくれる大人や大学生がいるから

① 信頼できる、自分を大切にしてくれる大人の発見は子どもたちの希望

② 大切にしてくれる実感は自分を大切にする思いに変容する

(3) 勉強ができなくても馬鹿にされない、比較されないから

① 一人の人間として認めてくれる。敬意は敬意として返ってくる

(4) 問題の意味がわかったり、解けたりする「快感」

① うれしいし、少し自分が変わったと実感できる、住む世界が広がる、見通しがよくなる一学びに向かう力

(5) 仲間がいるから

(6) 無料だから

学習支援・生活支援で「変化・成長する」子どもたち

- 1 自分を大切にしてくれることの実感ー明日へのささやかな希望
- 2 わからないことがわかる→世界が広がる「気持ちよさ」→学ぶ意欲
頑張れる自分の発見→自分への誇り
- 3 主観的な幸福感ー自分が一人の人間として認められ、公平に接してもらえたこと、社会や身近な大人たちへの信頼感が生まれたこと
- 4 子どもの成長・発達は「固有」の時間がある
 - 今は変化がみえない子でも「地下水脈」に、必ずどこかで現れる
 - 具体的「成果」をすぐ求めない、信頼して待つてあげる大人の存在

子どもの幸福度

- ▶ 大人たちからの温もり
- ▶ 学ぶことで広がる世界
- ▶ 仲間たちとの支えあい、自分の役割の自覚
- ▶ モデルとなる真似したい年上、大人の存在